

東日本大震災は大きな災害をもたらし、直接に被災された方々のみならず日本全体さらに世界に大きな影響を与えた。現在においても復興がなかなか進んでいない。このような状況の中で、非常に不遜なことであるが、この大震災が与えた災害とその復興以外の一つの視点について考えたことを述べる。

たまたま、「ハーバード大学は日本のために何ができるか (Harvard for Japan)」なる番組をみた。様々な討論がなされていたが、最も印象に残ったのは、「日本では震災のあったその日の夜に、多くの被災者が夜を屋根の下で暮らした。」「これは世界的に見て非常にまれなことであり、日本の災害対策のすばらしさを示している。」との発言である。日本においては、被災者ができるだけ屋根の下で暮らせるように努めていることは当たり前のように思う。これは、日本における「常識」ではないかと感じた（逆の意味かもしれないが、「日本の常識は世界の非常識」と言われていたことを思い出した）。世界で起こった自然災害において、被災者が外で暮らしているニュースをたびたび見たことを思い出した。ここに「常識」を考えることにした。蛇足ながら、この討論会の終了時に、討論会のタイトルを Harvard with Japan (日本から何を学ぶか?) に変更したいとの発言があった。このような変更を行うこともアメリカ知識階級の常識かもしれない。

社会、学問分野などいろいろなところでそれなりの常識が存在すると思う。様々な国際化が叫ばれているが、この難しさはそれぞれの国における常識の違いによるものである。電気関係の国際基準として IEC がある。この中の施設における電圧安全性に関して、歩幅電圧が規定されている。その大きさは 50 V である。機会があったのでイギリスでその専門家に、「この電圧は非常に低すぎるのではないか？」と質問した。その答えは、「裸足の国もあるから。我々 (イギリス人) は靴を履いていますから、これより高い電圧を基準にしている。」であった。国際的な仕事をする上で、裸足の国があることは、常識であることに気がついた。

震災以後、電力に関する意見が様々なところで出ている。発電と送配電の分離、自由化、スマートグリッド等々である。それに対しての勉強ができていないので、賛成・反対を述べることができないのは非常に残念である。その議論の中で、電力に関わっている人の電力に関する常識を無視した発言も多いことに気づく。その例の一つは、「一般的商品も通信も自由化で非常に安くなった。」の主張である。しかし、商品には品不足や売り切れがあることは常識であり、通信における「話中」があることも常識である。しかし、電力において、需要を満たす供給は常識である。このように述べると「反対」だと思われるかもしれないが、電力の常識を満たしつつ、多種多様な電源を導入し、安定で信頼度の高い電力システムを構築する技術を開発していかねばならないと考えている。これには、さらなる電気技術者が求められることになる。そのためにも電気学会は貢献しなければならないと考えている。

最近少し萎え気味ではあるが、「技術継承」の問題が取り上げられてきている。きちっとしたマニュアルを作っても技術が継承できないとの話が多くあった。この問題にも「常識」が絡んでくる。マニュアルが作成された背景となる「常識」が継承されていないためではなかるうかと考える。「・・・学」にも常識がある。最近の教科書はハウツー的、マニュアル的なものが多く、その背景となる「常識」がなかなか習得できない構成のものが目につく。かつての専門書 (絶版のものが多いのは残念である。経営的なことは充分理解しているが、電気学会で複版してほしい。) では、ゆっくり勉強するとその背景の常識を知ることができたのではないかと考えている。

「常識」は時代と共に変わっていくことは充分認識している。何かの変化が起こるときに、かつての常識を明確にし、ここが変わることを認識することが重要であると考えている。

以上、「常識」に関して考えていることの一部について記述した。上述のようなことを述べると「保守的」と言われる。残念である。



仁田 巨三

明星大学教授・東京大学名誉教授/元電気学会会長